

「はむらの授業指針」子どもの視点①

身に付く力とその価値が分かる

子ども自身、これからどのような「力」を付けるのか、身に付けた「力」がその後どのように生きて働くのかが分かれば、学ぶ意欲は高まります。

そのため、授業ではこの1時間でどのような「力」を付けるのか、そのためにいかなる学習活動を進めるのかについて、どの子どもにも分かりやすく説明する必要があります。加えて、身に付けた「力」をその後の学習や生活にどう生かせばよいのか、理解させることが重要です。いわゆる「学習の自覚化」の促進です。

例えば、国語科の授業で、意見の異なる相手との対話学習を行うとします。この時間に身に付ける「力」は、「相手の立場や考えを尊重しながら話し合い、自分の考えを深めたり広げたりする力」です。「力」を付けるための学習活動の一つとして、次のような流れが考えられます。

- 1 話題に対する次の事項を、ノートに箇条書きする。
 - 自分の考えとその根拠
 - 想定される自分と異なる考えをもつ相手の意見とその根拠
- 2 異なる意見をもつ相手と対話を行う。
- 3 対話を通して新たに気付いた事項を、赤ペンでノートに書き加える。

身に付けた「力」は、各教科の小グループでの話し合い、中学生であれば高校受検のグループ討議に役立つこと、さらに実社会では、ものの見方や考え方が異なる相手と積極的にコミュニケーションを交わす中で、合意形成や課題解決の糸口を見いだすことにつながることを伝えます。



人生・仕事の結果＝考え方×熱意×能力

京セラ名誉会長 稲盛和夫

この公式は、平均的な能力しか持たない人間が偉大なことをなす方法はないだろうかという問いに、私が自らの体験を通じて答えたものです。

出典：稲盛和夫著「心を高める、経営を伸ばす」（PHP研究所）

※「考え方」がマイナスであれば、熱意や能力が大きいほどマイナスの結果を生むこととなります。